

旧英領カリブの自立への道程 —歴史と注目すべき新しさ

堀内 真由美（愛知教育大学 准教授）



本稿では、カリブ諸国の中でも旧英領カリブ（現英連邦カリブ）の成立と自立への道程を振り返るとともに、独立前後の1960年代以降に展開された女たちによる政治・社会運動を通して、この海域が多様性を尊重する新しい社会構築に貢献してきたことを紹介する。

旧英領カリブの現在

新型コロナウィルス感染症の世界的大流行が一段落した2023年5月、新英国王チャールズの戴冠式が挙行された。その前後の新聞記事には、バルバドスの共和制移行のほか、ジャマイカが立憲君主制から共和制への移行を目指していること、アンティグア・バーブーダの両首相も王室離脱に言及したことが報じられた。旧宗主国的新国王登場を契機に、馴染みの薄かった旧英領カリブの島々の名が日本の人々の目に触れることとなった。

現在、英連邦カリブには、12の独立国（アンティグア・バーブーダ、バハマ、バルバドス、ベリーズ、ドミニカ国、グレナダ、ガイアナ、ジャマイカ、セントクリストファー・ネービス、セントルシア、セントビンセント・グレナディーン、トリニダード・トバゴ）と6つの未独立地域（アンギラ、モンセラット、バーミューダ諸島、ヴァージン諸島、ケイマン諸島、タークス・カイコス諸島）がある。島々に加えラテンアメリカ（中南米）の陸地に位置する国々も含む英連邦カリブは、地理的にも広大な範囲に及んでいることがわかる。

英領カリブの始まり

一大アンティル諸島と小アンティル諸島

15世紀末コロンブスによる新大陸の「発見」以来、ヨーロッパによる現在の中南米及びカリブ海域への探検が進む。カリブ海に限ってみれば、現在のキューバ、ハイチ、ドミニカ共和国、ジャマイカなどで構成される大アンティル諸島は、初期のスペイン帝国の中心地だった。少し遅れて、イギリスによるこの海域への進出が始まる。イギリスは17世紀半ばにジャマイカを征服し、

1670年にマドリード条約で正式に領有を認められた。ジャマイカは、大アンティル諸島内で面積では最小ながらも、砂糖プランテーションが次々と開発され18世紀にはイギリスに最も富をもたらす島となる。同時に、自前では奴隸を確保できないスペイン領への奴隸貿易の拠点としても繁栄を享受していく。

一方の小アンティル諸島は、現在、東カリブとも呼ばれる。ヴァージン諸島から南東に弧を描くように南米ベネズエラ沖に浮かぶトリニダード島まで続く島々である。現在の区分ではさらに南北に分けられており、小アンティル諸島の中央に浮かぶドミニカ島（日本では現在「ドミニカ国」とも表記）の北側をリーワード諸島、南をウインドワード諸島と呼ぶ。先にこの島々に到達していたスペイン人は、これら小島には関心を持たずに放置していた。そのため小アンティル諸島にスペインの影響は薄く、17世紀初頭から進出していたイギリス、フランス、オランダの影響が、現在も建築物や言語分野などに色濃く残っている。

イギリスは、リーワード諸島セントクリストファー島から植民活動を開始し、同島を起点に1630年はじめには南のアンティグアとモンセラットに植民した。一方、同時代のライバル、フランスも、リーワード諸島最南端のグアドループ島、ウインドワード諸島のドミニカ島とマルティニク島、さらに南のセントルシア島、セントビンセント島、グレナダ島に進出した。だがこれらのフランス領は、グアドループ島とマルティニク島を除いて、七年戦争後の1763年、イギリスに割譲された。同じように、ウインドワード諸島の最南端、現在のトリニダード・トバゴも、最終的にはフランス革命戦争期に、イギリスがトリニダード島とトバゴ島の両方をフランスから奪取する。

白人入植者、先住民、アフリカ奴隸

英領カリブに白人入植者が増えるにつれ、先住民カリブ人（カリブ族またはカリナゴ族とも表記されるが本稿では「人」を使用）との関係が悪化する。白人入

植者には軍隊が同行することが通例で、先住民は、白人が自分たちを力で排除することを察知する。セントクリストファー島を例にとれば、1626年に島の異変を感じたカリブ人リーダーが全白人の殺害を決意するが、そのことを知った白人によって逆に2000人のカリブ人が殺され、ほぼ全滅させられるに至った。ただし、ドミニカや他のウィンドワード諸島にはカリブ人が長く残存している島もある。時代は下るが、1903年に当時のイギリス議会がカリブ人の「保護区」を指定したため、ドミニカには現在、島の北東部に3700エーカー（東京ディズニーランドの約30倍）の土地が保障され、人口の2.9%およそ2000人のカリブ人が生活している。

一方、虐殺や白人入植者の持ち込んだ病気で人口の激減した先住民に代わって、入植者の生活を支え本国の富を生み出すための労働を担ったのが、アフリカから奴隸として運行された人々である。奴隸労働力を最も必要とする砂糖プランテーションから莫大な富を創出したジャマイカ島には、イギリス人プランター（大農園主）らが所有するプランテーション管理のための記録が残っている。18世紀末に書かれたものには「奴隸の増減記録」も含まれている。長い航海による強烈な船酔いで衰弱し、到着後も赤痢などの感染症にかかる者が多く、「シーズニング」と呼ばれる約3年の現地慣れの期間が終わる頃には、全体の5分の1が「減少する」と記録されている。

女性奴隸には、過酷な航海や植民地で患する病の他にも過酷な現実が待っていた。日常的な農園主や農園管理人からの性的搾取である。前述の農園主の記録には「奴隸労働者の内訳」という項目もある。帳簿に記された4つの内訳中、BはBlackを表し「100%黒人」を指す。SはSambo（サンボ）で混血を指すが「黒人の血が4分の3の者」で、同じ混血でもMはMulatto（ムラト）で「黒人の血が2分の1」を表す。四つ目のQはQuadroon（カドルーン）、つまり「黒人の血が4分の1」を指す。このように奴隸主を含む白人支配層が生み出した「肌の色のグラデーション」は、大英帝国の経済力が低下していくにしたがい白人支配層が減少していく後も、肌の色の濃淡による格差として残り続ける。「少しでも白に近い肌」の持ち主が、教育や就労へのアクセスにより有利な立場を保持し続けた。植民地支配の最も悪しき残滓の一つと言えよう。

西インド連邦（1958-62）という自立へのステップ

第一次世界大戦直後から英領カリブ植民地に大きな

変化が訪れる。英領カリブ植民地における自治権要求運動は、混血の人々とりわけ「肌の色の薄い人々」（「カラード」とも呼ぶ）が経済力を持ち政治的な発言力も増していく19世紀半ばには始まっていたが、本格化するのは1920年代のことだ。同大戦で経済的に大打撃を受けた本国による締め付けに抗して、島々ではストライキや労働者による暴動も頻発するようになる。英領カリブ植民地にとっての自立への契機は、これら混亂の中から生まれた労働運動の活発化と労働組合の組織化だった。そこには本国の影響もあった。1930年労働党政権の植民地大臣シドニー・ウェヴが植民地における労働法規の確立と労組の合法化を主張すると、英労働党と英労働組合会議は、植民地での労組や労働党の設立を支援するようになる。西インド連邦構想は、こうした労働者意識の高まりと自治権要求運動の中で具体化されていった。さらに、冒頭でも言及したような広大な海域に点在する植民地から、第一次世界大戦に西インド連隊として「帝国の戦争」に駆り出された後、人々が、奴隸貿易と植民地化という歴史に起因する「共通の文化を持つ西インド人」などの意識を育んでいったことも連邦成立の要因の一つである。

イギリス政府は当初、島嶼間交通を促進することを目的に一人の総督の下での英領カリブ諸島の政治的統合を構想していた。一方、各島の労働運動や自治権要求運動の指導者たちは、本国政府とは別に、かれらの間での合意形成に動いていた。1932年、バルバドス、ドミニカ、セントビンセント、アンティグア、セントクリストファー、グレナダ、トリニダード、セントルシア、モンセラットの英領東カリブのほとんどの島からリーダーたちが一堂に会した「ドミニカ会議」が開催される。同会議で草起された西インド連邦憲章は本国には受け入れられなかったが、この会議をきっかけに、活況を呈する労働運動の波に乗り恐慌を克服する手段としての緩やかな島嶼間連携が始まり、指導者間の意思疎通も促進された。

トリニダードのシプリアーニ、バルバドスのアダムズ、ジャマイカのマンリーなど、自島の労働運動と自治要求運動を率いたリーダーたちと、本国との粘り強い話し合いの末1958年1月連邦憲法が制定され、英國（女）王を元首、総督を行政の長とし、10地区（アンティグア・バーブーダ、バルバドス、ドミニカ、グレナダ、セントクリストファー・ネービス・アンギラ、セントルシア、モンセラット、セントビンセント及びグレナディーン諸島、ジャマイカ、トリニダード・トバゴ）

西インド連邦の各地域の位置



で構成される西インド連邦が成立した。同年3月の連邦下院議員選挙実施後に連邦内閣が組閣され、バルバドスのアダムズが連邦政府首相に就任した。

だが連邦はわずか4年で瓦解する。連邦内で早くから島内自治が進み人口も経済力もあるジャマイカとトリニダードにとって、総督権が留保され予算決定権もない連邦に留まっている意味は見いだせなかった。1961年ジャマイカが離脱し、トリニダードも翌62年に離脱を決定する。西インド連邦は1962年5月をもって解散となった。

英連邦カリブの自立と新しさ —カリブ女性の共闘と社会変革

西インド連邦の崩壊後も自立を模索する島々の運動は続いた。そこには優れた政治的リーダーの存在ももちろんあった。日本でも比較的知られる人物に、ジャマイカに次いで連邦を離脱したトリニダード・トバゴの初代首相エリック・ウィリアムズ（在任1962-81）がいる。奴隸の子孫であるアフリカ系と、奴隸制廃止以降に本国が投入したインド系年季労働者とその子孫が人口をほぼ二分する国を率いたウィリアムズの、二大エスニック集団のバランスに注力した指導力は、西インド諸島大学セント・オーガスティン校ジェンダー研究センター初代所長でカリブ海域のフェミニズム研究第一人者パトリシア・モハマドが、「20世紀トリニダード・トバゴの歴史は彼の理念抜きには語れない」と書くほど傑出していた。だが彼女のウィリアムズへの言及は、「この海域でジェンダー平等への声を上げた女たちのいったい何人が彼のように研究対象とされてきたか」との問いかと対を成すものだった。

モハマドは、同ジェンダー研究センター設立5周年（1998年）を記念する講演記録の中で¹、有名無名の女性たちの活動を振り返り、島々の独立前と後の時代に共通する要素の一つとして、「カリブ海域外の影響と海域内の協力と我々の独創力」を挙げる。19世紀後半イギリスで興隆した女性参政権運動の影響を受けジャマイカで同運動が活発になったように、「カリブ海域内の独自性」にこだわらず、海域外からの発信でも、島々の女性たちが価値ありと判断したものであれば取り入れる柔軟性と、さらにそれをカリブ流に発展させていくさまをモハマドは「我々の独創力」と呼び、今日の世界にインパクトを与えた例を挙げる。

1980年代初頭、トリニダードに女性の低賃金問題を議論する全国組織が立ち上がった。一方、同時代のイギリスに、「家事労働」という女性たちの無償労働を可視化させるため、『「家事労働に賃金を』運動』（the Wages for Housework Campaign）を展開する女性がいた。ウィリアムズの政策ブレーンで思想家だったC.



西インド諸島大学名誉教授、パトリシア・モハマド氏近影
(出所:西インド諸島大学ホームページ)

L. R. ジェームズのパートナー、セルマ・ジェームズだ。トリニダードの女性運動と自身の運動との関連性に気づいたセルマは、様々な女性団体や女性議員たちに運動への援助を手紙で働きかけた。トリニダードの女性上院議員ダイアン・ヤットは手紙を受け取りすぐに議会で取り上げた。その結果トリニダードは、「GDP 国内総生産に家事労働を含めるべき」との 1985 年国連「世界女性会議」ナイロビ大会において可決された勧告を、世界で最初に取り上げた国となったのである。現在、日本の私たちも知るアンペイド・ワーク（無償労働＝家事労働）をめぐる一連の議論の口火は、カリブ海女性たちの活動によって切られたのである。

旧英領カリブの成立と自立への道のりとその陰であまり知られてこなかったカリブ海女性たちの活動を見

てきた。歴史的にも物理的にも遠いと思っていた島々から、世界規模でのジェンダー構造変革への狼煙が上がっていた。この海域から新しい社会の価値観が創造されていくことに今後も注目していきたい。

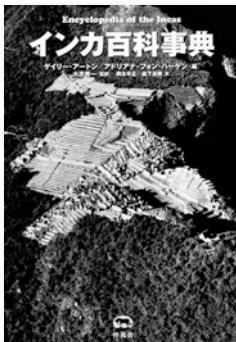
1 Mohammed, P., "Stories in Caribbean Feminism: Reflections of the Twentieth Century", *Fifth Anniversary Lecture*, Centre for Gender and Development Studies, The University of the West Indies, St. Augustine, November, 1998.

参考文献

川分圭子・堀内真由美編著（2023）『カリブ海の旧イギリス領を知るための 60 章』明石書店。

（ほりうち まゆみ 愛知教育大学 准教授）

ラテンアメリカ参考図書案内



『インカ百科事典』

ゲイリー・アートン、アドリアナ・フォン・ハーゲン編
大平秀一監訳、岡本年正・森下壽典 訳 杵風舎
2024年2月 437頁 15,000円+税 ISBN978-4-8649-8106-4

1450 年頃からスペインの征服者ピサロにより滅亡させられた 1532 年までの間、南米西岸に多様な民族を征服し広大な版図を拡げたインカ帝国は、その創造神話、インカの祖先たちが各地の旅の末に現在のクスコに首都となる街を築き、概ね 11 人（9 代パチャクティから歴史が認識されている）の王が連綿と統治する王朝が創られたのだが、広大な領土を武力（それは後に侵略したスペイン人の物に比べると不十分だったが）と文字を持たないながら効率のよい行政システムにより統治し、被支配者との相互補完の制度と共に神々、祖先崇拜等の慣行によって成立した集団的アイデンティティの形成を権力基盤としたのである。

本書は大帝国インカの社会、文化、歴史の輪郭を制度、人名も含め、テーマ別に 11 項（歴史上の人物、編年、土地・人々・言語、経済と生計、首都クスコとその組織・構成、役人と国家・帝国の制度、宗教・儀礼・儀式、社会領域・親族・ジェンダー・階層・芸術・工芸・技術・科学・戦争・拡大・地方との関係、スペインの侵略と征服）、128 の項目を 35 人の研究者が執筆しており、目次とは別に巻末に総合索引、欧文見出し索引が付いていて、インカ帝国の全貌と興味ある事項の知識を得易い工夫がなされている。

原著の編者は米国ハーバード大学教授・人類学部長とペルー考古学ライター、監訳者はアンデス考古学を専門とする東海大学教授、2 名の訳者はいずれもインカ考古学調査経験もある文化人類学研究者。本書で描かれているインカ社会は主にスペイン征服者側の遺したクロニカ・歴史文書が基盤になっており、今後の研究によってクロニカの問題点が解き明かされた場合には、本書のインカ像は変わる可能性があると監訳者は喚起している。〔桜井 敏浩〕